

ポストコロナ時代の都市機能の方向性に関する調査について (アンケート調査結果概要)

一般社団法人中国経済連合会（会長 清水希茂）は、中国電力株式会社（社長 瀧本夏彦）ならびに公益財団法人中国地域創造研究センター（会長 芦谷茂）と共同で、ポストコロナ時代の都市機能の方向性に関する調査を実施しています。今回、その一環として実施したアンケート調査の結果概要をとりまとめましたのでお知らせいたします。

1. 調査の目的

少子高齢化や人口減少など深刻な社会課題が全国に先駆けて進行する中国地域において地方創生を強力に推進するためには、人口ダム効果が期待できる拠点都市を中心とした都市圏における取組が重要であり、こうした変化を踏まえた、ポストコロナ時代にふさわしい都市圏形成について検討が必要と考えられます。

本調査は、こうした問題意識のもと、中国地域最大の都市圏である広島広域都市圏（以下、「広島都市圏」）を取り上げ、圏域の地域特性を踏まえた発展の方向性と具体的な取り組みについて、各分野の有識者で構成する検討委員会により検討を進めております。今後、今回の調査結果を参考に、検討委員会での議論を進め、今年度末までに最終報告書を取りまとめる予定です。

注：広島広域都市圏：広島市の都心部からおおむね 60km の圏内にある、東は三原市から西は山口県柳井市周辺までの 28 市町で構成される都市圏。

2. アンケート調査結果のポイント

今回の調査により、広島都市圏の今後の方向性に向けて、以下のような知見が得られました。調査結果の概要は別紙をご参照ください。

- 在宅勤務の定着等により、今後も都心などへの外出機会が、感染拡大前の水準に回復せず、減少することか考えられる。
- 郊外や周辺都市においては、居住だけでなく、働く場・屋外の憩いの場など様々な用途や機能が融合した生活圏の形成が必要。
- 都心の活力を維持するために、オンラインで代替しがたい体験を提供し、情緒的な魅力により多様な人を惹き付ける都心を目指すことが必要。
- 都心の魅力を高めるため、多様な利用ニーズに応え、居心地の良さを高めるオープンスペースや緑地・水辺などゆとりある屋外空間の形成が必要。
- 都心へ人が出かけたいようになるように、郊外や周辺都市と都心つなぐ、シームレスでゆとりのある公共交通ネットワークの構築とともに、都心におけるウォーカブルな移動環境づくりが必要。

注：ウォーカブル：「歩く」を意味する「walk」と「できる」の「able」を組み合わせた造語で、「歩きたくなる」「歩くのが楽しい」といった語感を持つ。

3. 調査の概要

(1) アンケート調査の概要

広島都市圏内の事業所や住民に対し、暮らし方や働き方に関する実態・意識等を尋ねるアンケート調査を実施しました。なお、住民意識調査については、広島都市圏の特性を明らかにするため、地方ブロックの類似都市である福岡都市圏（福岡市と近隣の16市町で構成される都市圏）との比較を行いました。

■ 住民意識調査

○調査期間:2022年8月29日～8月31日

○調査方法:インターネット調査

○調査対象:広島都市圏及び福岡都市圏の20～40代の方

○回答者数:2,000人(広島都市圏、福岡都市圏各1,000人)

○調査項目:①コロナ禍による行動や意識の変化について

②都心での体験、都市イメージなどについて

■ 事業所調査

○調査期間:2022年8月19日～9月2日

○調査方法:郵送調査

○調査対象:広島都市圏に立地する事業所

○回答件数:218件

○調査項目:①就業・雇用環境の変化について

②事業所の立地環境について

③人材の確保や育成について

(2) 検討委員会の構成

【委員】 ※ () は専門分野等

(地 域 政 策 等) 戸田 常一／安田女子大学現代ビジネス学部 教授〈委員長〉

(交通・インフラ) 神田 佑亮／呉工業高等専門学校 教授

(都市政策・環境) 田中 貴宏／広島大学大学院先進理工系科学研究科 教授

(地域・人づくり) 木原 一郎／広島修道大学国際コミュニティ学部 准教授

- ・本調査結果は、当連合会ホームページに掲載しています。

URL : <https://chugokukeiren.jp>

中国経済連合会（担当：土井） TEL：082-548-8519／FAX：082-245-8305

- ・アンケート調査結果に関するご質問等がございましたら、下記までご連絡ください。

中国地域創造研究センター（担当：吉田） TEL：082-548-8718／FAX：082-245-7629

以 上

① 郊外や周辺都市の生活圏について

◆今後の都市圏の方向性に向けた知見：

在宅勤務の定着等により外出機会が減る中で、郊外や周辺都市において、居住だけでなく、働く場・屋外の憩いの場など様々な用途や機能が融合した生活圏の形成が必要。

【主な調査結果】

- 週1日以上在宅勤務の実施割合は約2割だが、今後在宅勤務を希望する割合は5割を超え、在宅勤務の拡大ニーズがある。在宅勤務を希望する人の平均希望日数は週2.9日となっている。(図1)
- テレワークを実施する事業所は約4割で、このうち7割を超える事業所が、今後も実施する予定。テレワークを実施・検討する理由としては、生産性の向上やワークライフバランス向上が多く、主に働き方改革の一環として実施されており、今後も一定程度定着することが考えられる。(図2～4)
- コロナ禍により自宅周辺での活動が増え、自宅周辺にも様々な都市空間が求められている。特にオープンスペースや憩いの場に対するニーズが高い。(図5・6)
- 仕事よりも生活を重視する傾向が強まっている。在宅勤務の定着と合わせ、働く場と居住の場が混在化し、都心へ人が出る機会が減少していく可能性がある。(図7)

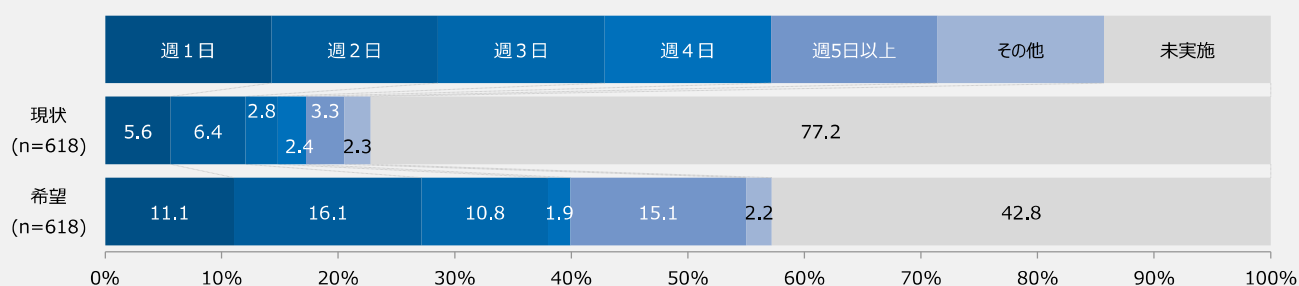


図1 在宅勤務の実施状況・希望（広島都市圏、会社員・公務員）【住民意識調査】

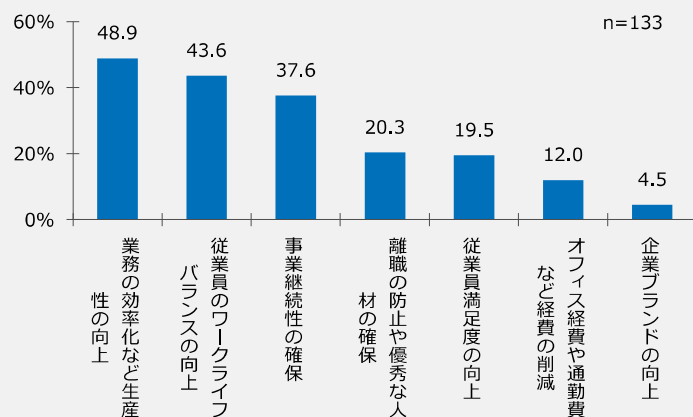


図2 テレワークを実施または検討する理由【事業所調査】

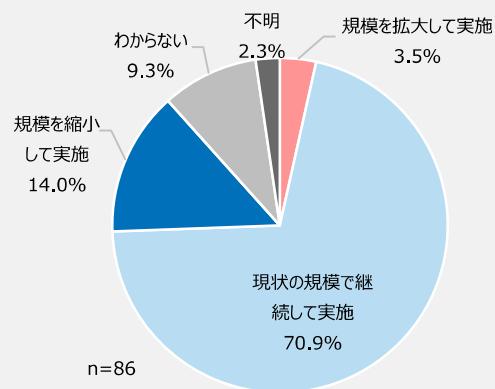


図3 今後のテレワークの実施予定【事業所調査】

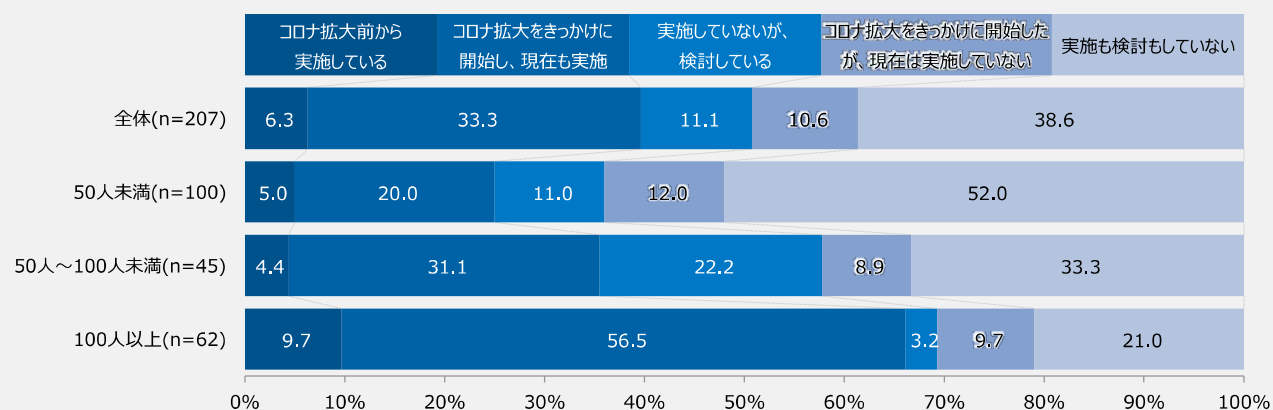


図4 従業員規模別テレワークの実施状況【事業所調査】

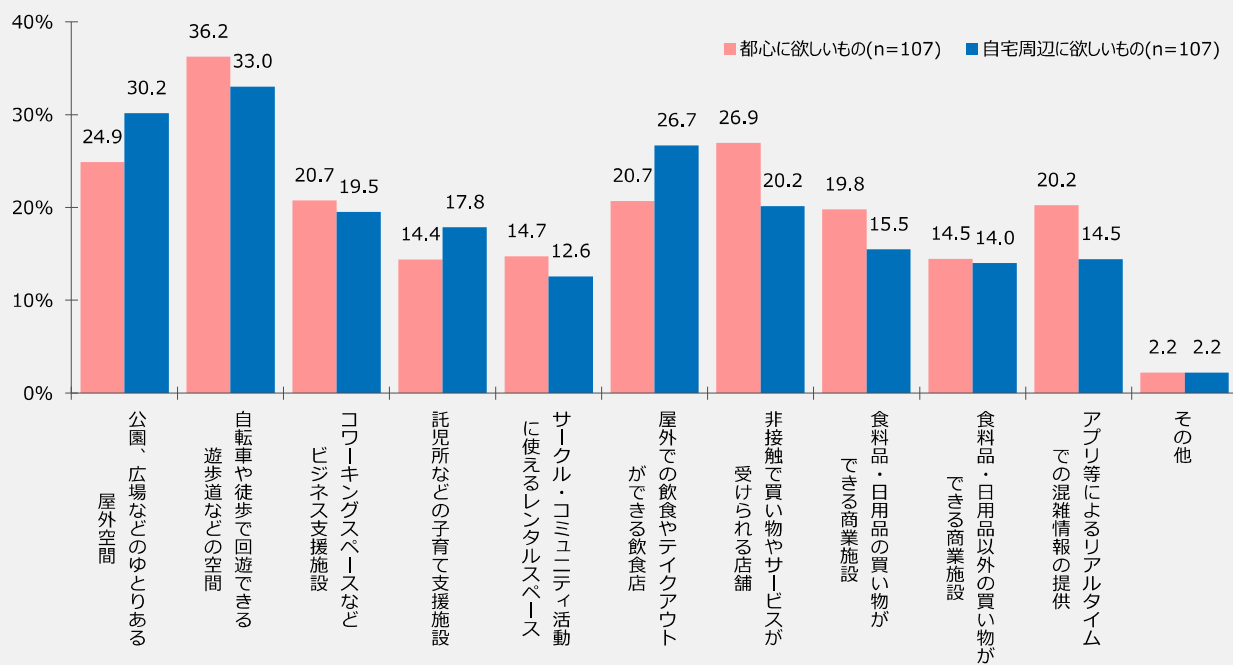


図5 欲しいと思う都市空間・サービス（広島都市圏のうち都心以外の居住者、在宅勤務をしている人）【住民意識調査】

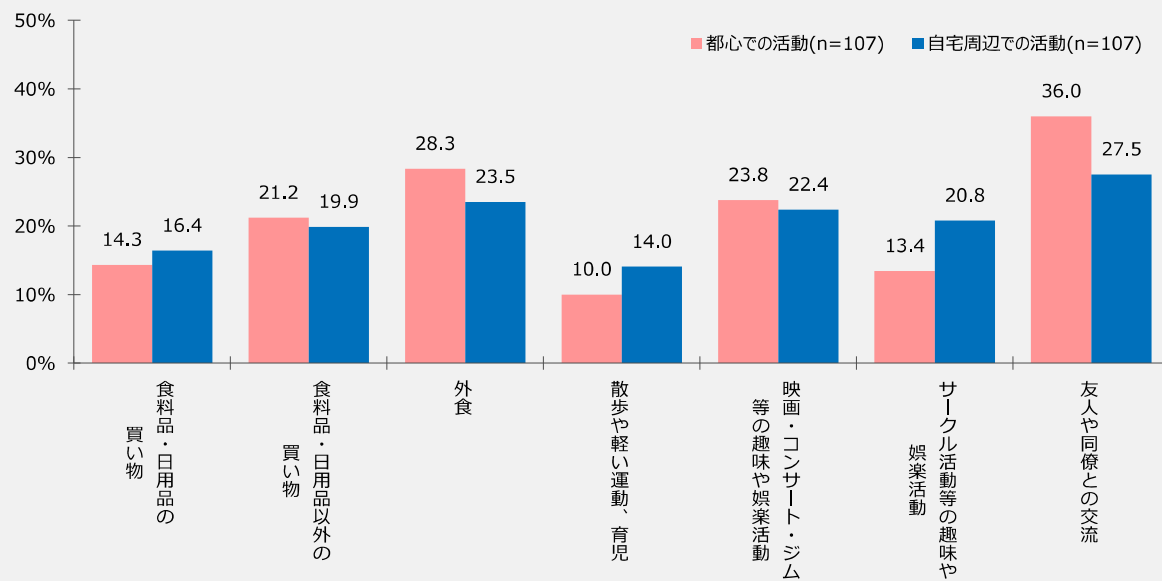
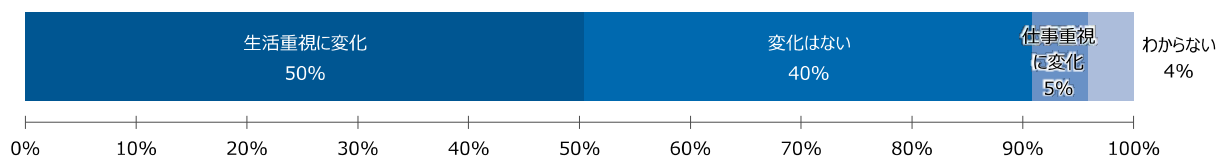


図6 コロナ収束後に増えると思う日常活動（広島都市圏のうち都心以外の居住者、在宅勤務をしている人）【住民意識調査】



（出典）新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査（令和2年6月21日、内閣府）

図7 コロナ拡大前に比べた仕事と生活に関する意識の変化【参考：内閣府調査】

② 都心の魅力について

◆今後の都市圏の方向性に向けた知見：

都心の活力を維持するために、オンラインで代替しがたい体験を提供し、情緒的な魅力により多様な人を惹き付ける都心を目指すことが必要。

【主な調査結果】

- 広島都市圏は人口減少傾向が見られ、2022年に広島市でも人口減少に転じている。ベンチマークとして福岡市の転入超過数と比較を実施したところ、15～24歳の若い世代、特に女性における差が顕著であり、福岡市と比べ、人口のダム効果が十分に発揮されていない状況にある。(図8・9)
- 広島都市圏における都心に対する満足度や都心への外出率は、福岡都市圏に比べ低く、都心の魅力に相対的な差がある可能性がある。(図10・11)
- 都心の魅力を構成する要素として、「利便性」や「コンパクト」などの機能集積に関する要素だけでなく、「刺激・活気」「興奮・感動」「界隈性・個性」「多様性」などの情緒的な要素についても、福岡都市圏に比べ満足度が低く、特に女性で低い傾向にある。一方で、「ゆとり・癒し」については差が小さい。(図12・13)
- 都市活動のオンライン化が進む中で、リアルな体験や交流の重要性を感じている人も多く、オンラインでは代替しがたい活動として、休日の外出や外食、癒し体験、交流、娯楽体験などがある。(図14)

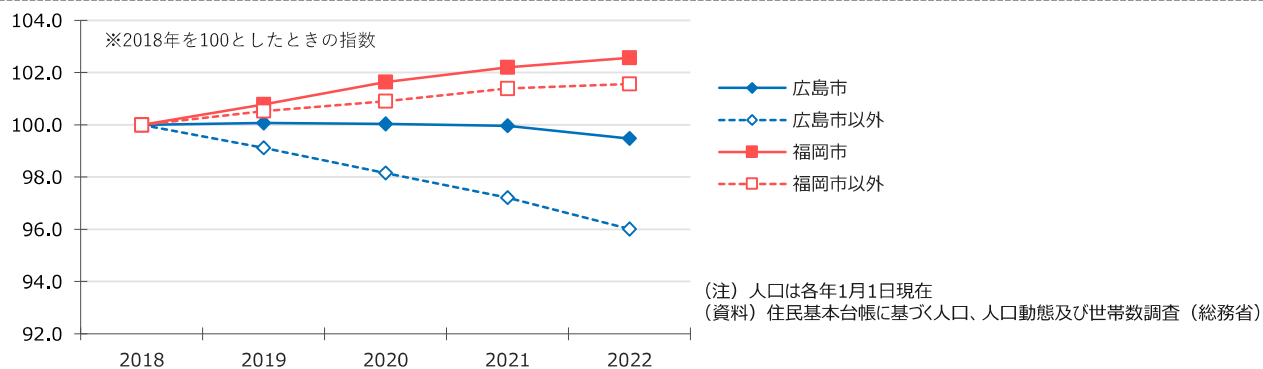


図8 都市圏の人口の推移【参考】

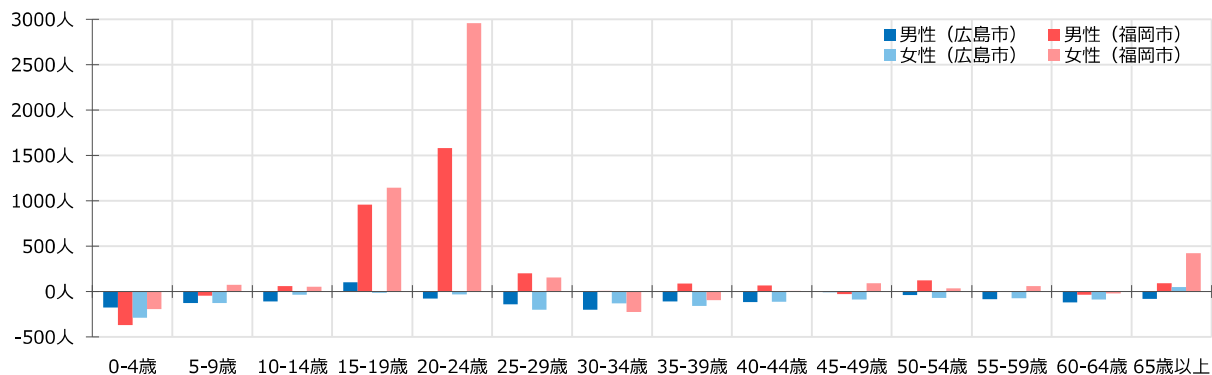


図9 中心都市の転入超過数（2021年、男女年齢階級別）【参考】

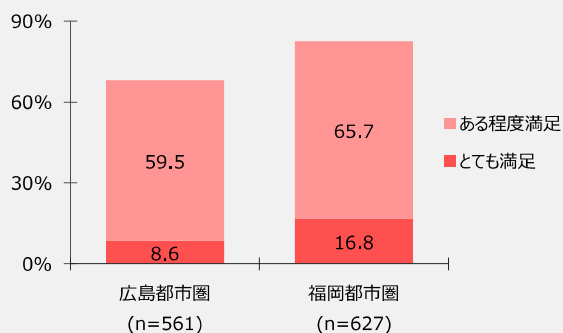


図10 都心の満足度（日頃都心に出かける人）【住民意識調査】

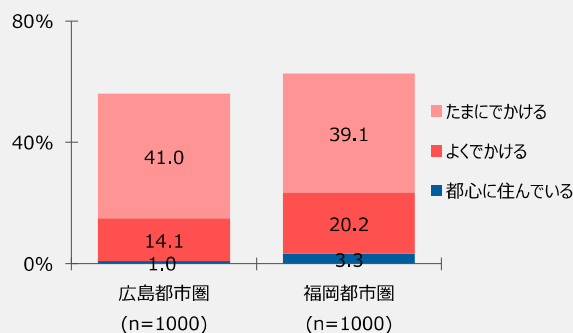
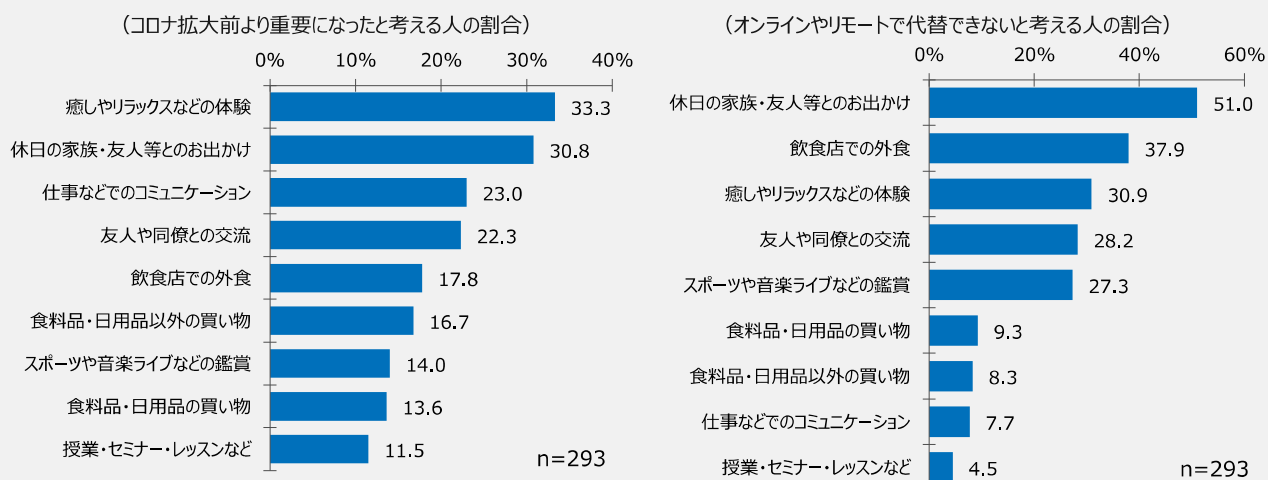
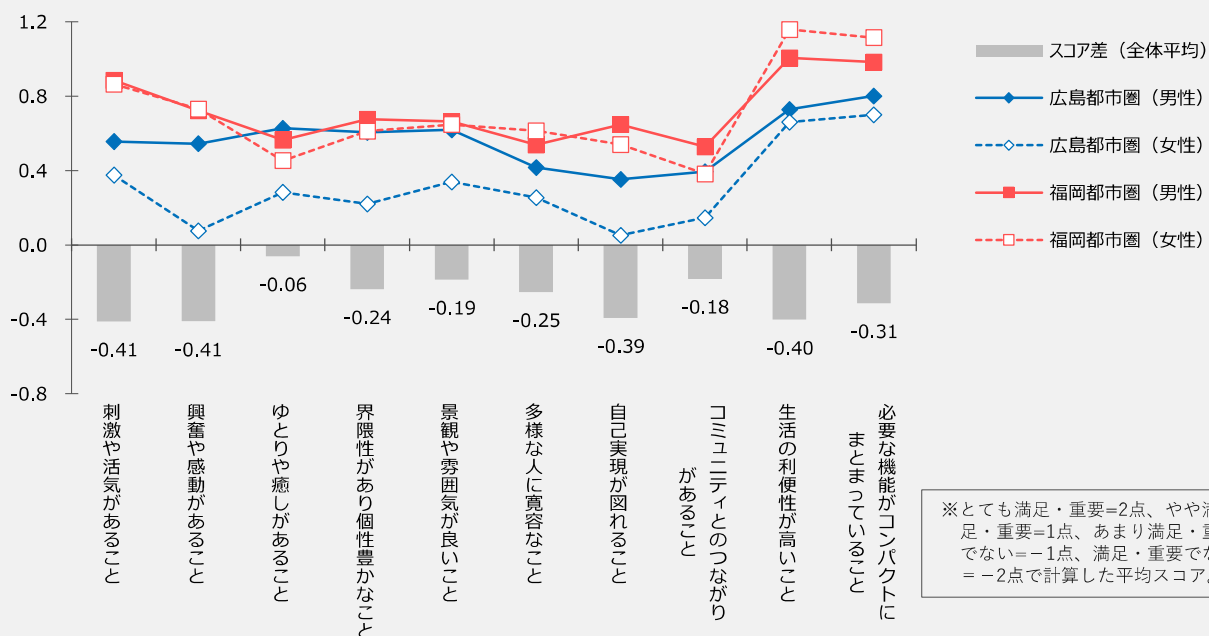
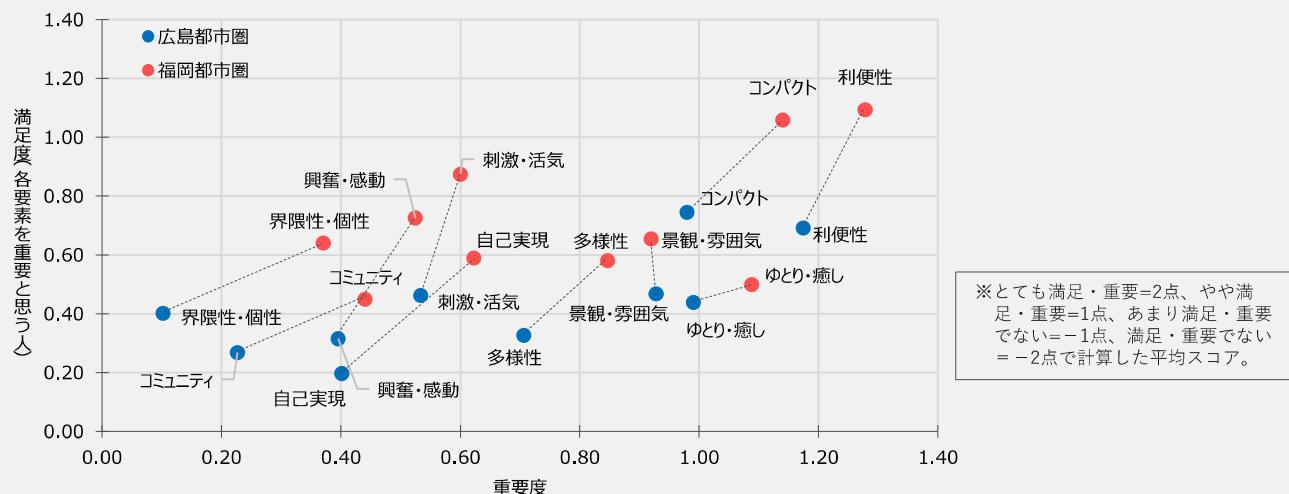


図11 都心への外出頻度【住民意識調査】



③ 都心におけるゆとりある屋外空間について

◆今後の都市圏の方向性に向けた知見：

都心の魅力を高めるため、多様な利用ニーズに応え、居心地の良さを高めるオープンスペースや緑地・水辺 などゆとりある屋外空間の形成が必要。

【主な調査結果】

- 公園利用者が増加するなど、新しい生活様式の定着により、公園・広場などのゆとりある屋外空間のニーズが高まっている。(図5、図17)
- 都心における「憩いや癒し」に対するイメージは、福岡都市圏と同程度であり、この点を伸ばすことが、広島都市圏の特徴の創出につながる可能性がある。(図15)
- 水辺を楽しめる公園や多様な使い方ができる広場、気軽に休憩できる空間などの認知は福岡都市圏を下回っており、強みとするための空間づくりができていない可能性がある。(図16)

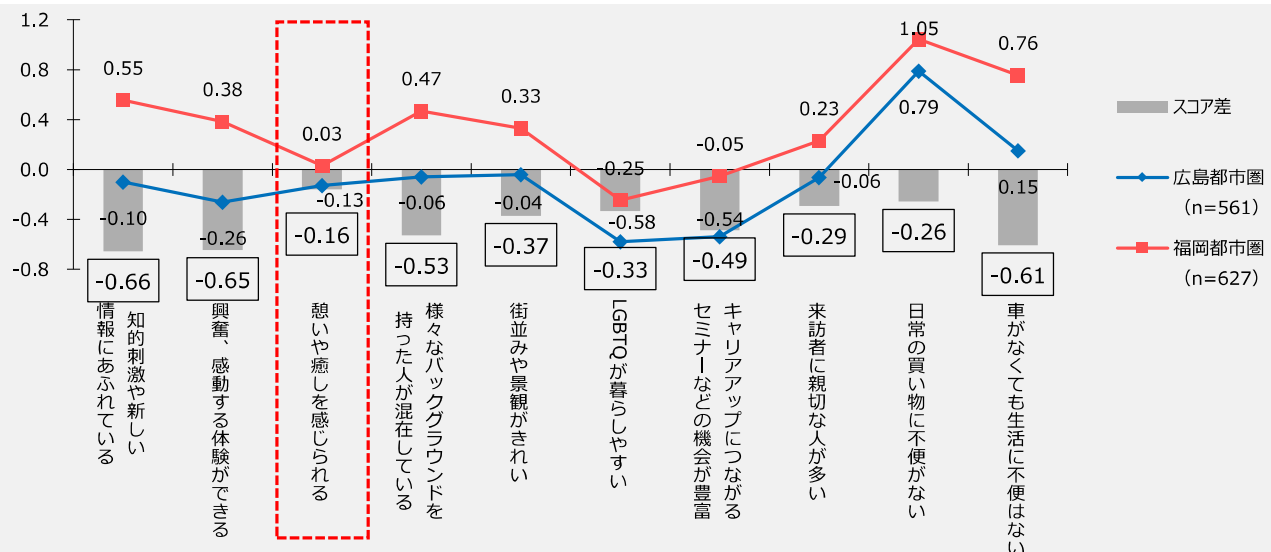


図15 都心のイメージ（日頃都心に出かける人）【住民意識調査】

※とてもそう思う=2点、ややそう思う=1点、あまり思わない=-1点、思わない=-2点で計算した平均スコア。

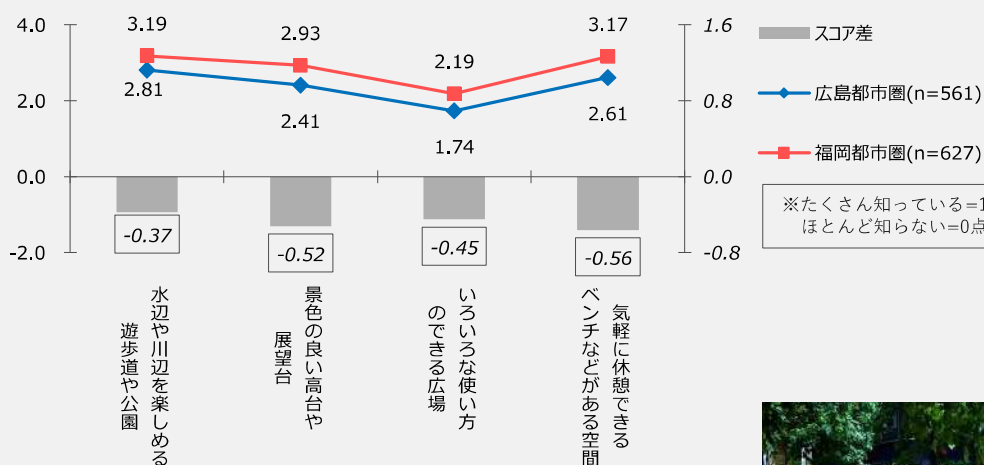


図16 都心にある場所の認知度（日頃都心に出かける人）【住民意識調査】



図17 屋外空間（街路）の活用事例【丸の内ストリートパーク】

④ 公共交通ネットワークやウォカビリティについて

◆今後の都市圏の方向性に向けた知見：

都心へ人が出かけたいようになるように、郊外や周辺都市と都心つなぐ、シームレスでゆとりのある公共交通ネットワークの構築とともに、都心におけるウォカブルな移動環境づくりが必要。

【主な調査結果】

- コロナ前よりも公共交通の利用頻度が減少した人が4割弱で、公共交通の利用頻度が低下。オンライン化や在宅勤務の定着により、外出回数が減少している。(図18)
- 公共交通に対し、「早く着くこと」とともに「ゆとり」を求める人が多い。特に日頃都心に出かけない人でその傾向が強く、利用頻度に影響している可能性がある。(図19)
- 広島都市圏の都心に立地する事業所では、交通結節性に対する重要度が高い。(図21)
- 健康づくりニーズの高まりなどから、都市のウォカビリティが重視されるようになっているが、広島都市圏における都心のイメージとして、「車がなくても生活に不便はない」の評価が福岡都市圏に比べ低く、日常の買い物や病院などの「生活の利便性」以上に「公共交通や徒歩での移動環境の利便性」が低いことが考えられる。(図20)

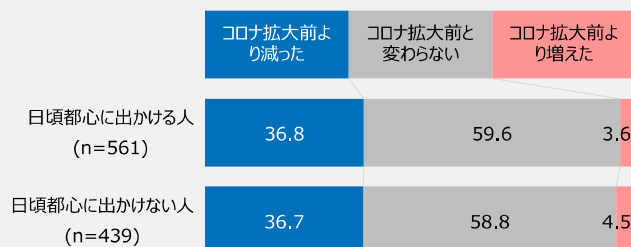


図18 公共交通の利用頻度の変化（広島都市圏）
【住民意識調査】

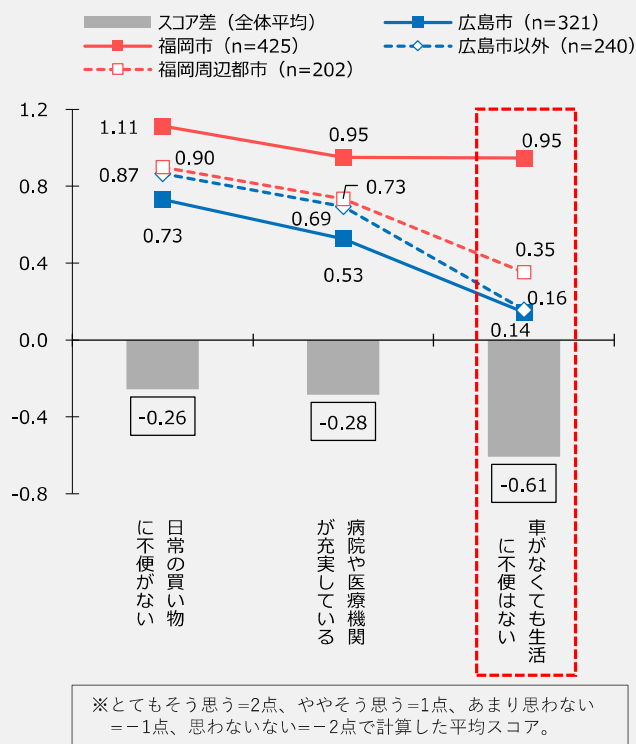


図20 都心のイメージ（居住地別、日頃都心に出かける人）【住民意識調査】

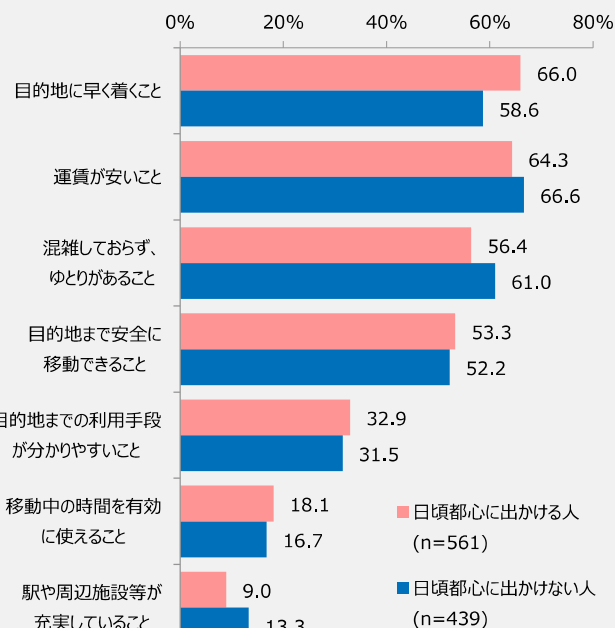


図19 公共交通を利用する上で重要なこと（広島都市圏）
【住民意識調査】

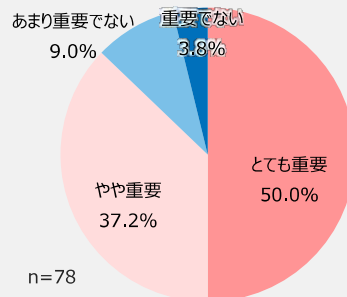


図21 広域的な交通結節性やシームレスな乗換機能の重要度（都心に立地する事業所）【事業所調査】